

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770059

研究課題名(和文) 横浜中華街の民族芸能サークルにおける華僑の若者のジェンダー意識

研究課題名(英文) Gender Perceptions of the Young Members of Ethnic Performing Arts in Yokohama's China Town

研究代表者

有澤 知乃(Arisawa, Shino)

東京学芸大学・留学生センター・准教授

研究者番号：90588906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：横浜中華街で行われている獅子舞・龍舞・民族舞踊などの民族芸能サークルには、長年日本に暮らす老華僑のみではなく、近年やってきた新華僑の子女の他、日本人と華僑とを親に持つ者や、両親共に日本人という者など様々な文化的背景を持つ若者たちが参加している。彼らは練習や公演を重ねることで、中国的と考えられる女性らしさや男性らしさのステレオタイプな表現を習得する一方で、メンバー同士の交流によって単一でないジェンダー表現に気づき、また自らのジェンダー意識を見つめなおしているという側面がみられた。

研究成果の概要(英文)：Young people of various cultural backgrounds participate in the ethnic performing arts circles, such as the Lion Dance, Dragon Dance, and Ethnic Dance in Yokohama's China Town. The members include old comer Chinese, new comer Chinese, people of Chinese and Japanese mixed parentages, and Japanese with no Chinese kinship. While they learn what is thought to be the Chinese stereotype of feminine and masculine expressions through practices and presentations, they also realize, through the interactions with other members, that there are a multiple of gender expressions, and they eventually reconsider their gender perceptions.

研究分野：民族音楽学

キーワード：民族芸能 アイデンティティ ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

音楽や舞踊のパフォーマンスを通じたエスニック・アイデンティティやジェンダー・アイデンティティの形成については、これまで民族音楽学や民族芸能研究、パフォーマンス研究やカルチュラル・スタディーズなどの分野において、世界各地の様々な民族や芸能集団を対象に行われてきた。これらの研究では、「アイデンティティ」は流動的かつ重層的であり、芸能は、この複雑で目に見えないアイデンティティを、ある形として体現し表現する手段であるという議論が主流となっていた。しかし、「民族」芸能においては「エスニシティ」の表現に焦点がおかれ、その芸能によって同時に体現されている「ジェンダー」の観点は十分に議論されてきたとはいえない。

在日華僑の祭りや民族芸能にみられる「アイデンティティ」の問題を論じたこれまでの研究は、華僑総会の理事など、華僑社会のリーダー達である男性の視点に立脚した華僑「集団」としての議論が主体となっており、一般男性（若者を含む）や女性の視点からの議論が欠けていた。例えば、王維（『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』2001年）や、張玉玲（『華僑文化の創出とアイデンティティ』2008年）では、インタビューの対象は、ほとんど華僑社会の有力者であり、彼らが語る民族芸能の「意義」は、集団のリーダー達が認識する民族としての「誇り」や「価値観」を代弁しているものであった。

本研究は、民族マイノリティである日本の華僑が、ホスト社会との関係において、どのような「中国民族（華僑）的」女性観や男性観を、民族芸能によって構築し表現しようとしているのかを検証する。そして、芸能活動に従事する若者が、「民族性」と「ジェンダー」をどのような相互関係において認識しているのかを明らかにしようと考えた。

横浜中華街の民族芸能を対象とした前述の二つの先行研究では、獅子舞を主な研究対象としており、獅子舞が海外華僑の「エスニック・アイデンティティ」の象徴となっているという主張に加えて、大陸系と台湾系に二分された横浜華僑社会における、獅子舞グループの分裂の歴史と、近年における協調関係の構築などが主な論点となっている。本研究では新たに、政治的イデオロギーの差による、民族芸能のジェンダー表現の相違を検証すると共に、日本人や新華僑がサークルのメンバーとして加わることによって、舞踊や音楽表現におこる変化や、活動に参加する若者たちの心に生じるゆらぎや葛藤に着目することが必要であった。

2. 研究の目的

民族芸能のサークル活動に関わるどのような場面において、民族集団における規範としての「ジェンダー境界」が認識されるのか、そして、その認識プロセスにおいて、自己のジェンダーに対する意識や自己が体現したいジェンダーイメージに、どのような変化や葛藤が生じているかを明らかにする。対象は、二つの中華学校（大陸系・台湾系）の卒業生である20代の若者を中心とした、獅子舞・龍舞・民族舞踊サークルのメンバーとした。

研究代表者がこれまで、獅子舞を指導する華僑男性に行った聞き取り調査では、獅子舞は「華僑の誇り」であり「アイデンティティ」であると同時に、獅子舞は「男の憧れ」であり、獅子舞ができなければ「男じゃない」といった回答が得られた。これは、獅子舞が「中国（華僑）的男性像」の象徴とみなされていることを示している。また、獅子舞とセットで行われることが多い龍舞も男性メンバーのみによって行われるが、「獅子と龍は中国を代表する霊獣であり、華僑にとって大切な芸能だ」というコメントもみられた。このように、獅子舞や龍舞は民族性を体現する芸能であると同時に、華僑集団が規範する「男らしさ」を体現する手段でもある。一方で、女性の群舞による「民族舞踊」は、獅子舞の前座として花を添える形で行われている。ロングドレスをまとった女性達が優雅な手足の動きで体現しようとしているのは、見るもの目には明らかに「女性らしさ」として映る。

では、華僑の若者達は、これらの民族芸能サークルにおける体験の中で、「民族性」や「男性性」「女性性」をどのような形で認識しているのか。「獅子の躍動的な動きが中国のエッセンスを表現していると感じる」「中国の民族舞踊は、日本舞踊と違って顔の表情で女性らしさを表現していると思う」「獅子舞をやりたいが、大股になるから女は駄目だと先輩に言われた」など、ジェンダー認識のプロセスとその中で葛藤を、聞き取り調査から検証する。では、男女の境界が明確に示されていない伴奏音楽を担当するメンバーの意識はどうであろうか。獅子舞と龍舞は、太鼓と銅鑼の男女合同のアンサンブルによって伴奏されている。大音量の銅鑼や、手足を大きく広げて演奏する太鼓は、力強さや男らしさを表現しているとみなし得るが、実際に参加している男女のメンバーの意識において、ジェンダー境界はどのように認識されているだろうか。個々のメンバーの体験の中から、若者たちが、民族芸能サークルへの参加を通して何を実現したいのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

二つの中華学校（横浜山手中華学校・横浜中華学院）の卒業生を中心とした民族芸能サークルのメンバーへのアンケート調査により、メンバーの背景とサークル活動の概要を把握した。（調査項目：サークル参加の動機、いつから始めたか、両親や家族の民族芸能体験の有無、公演参加の経験、民族芸能サークル以外のサークルに属しているか、他に習い事（ピアノ、バレエ、箏、和太鼓等）をしているか [芸能に関わる日常体験の把握]）さらに、練習や公演の観察を行い、メンバー同士の交流や、サークル以外の人々との交流の様子を把握した。

民族芸能サークルのメンバーは中華学校の卒業生であり、彼らの芸能活動は、学校での「民族教育」が原点となっている。よって、二つの中華学校における民族教育の授業内容を、資料や学校関係者からの聞き取りによって把握した。

横浜中華街では、年間を通して様々な祭りやイベントが開催される。過去の行事における芸能グループの参加状況を、主催団体である華僑総会、中華会館、関帝廟、媽祖廟に保管されている記録や関係者からの聞き取りを基に把握した。

春節や関帝誕などの祭り、建国記念日などのイベントにおける、民族芸能の公演やパレードの履歴や変遷を、華僑総会や中華会館の資料及び関係者へのアンケート調査により把握した。

アンケート調査から、個別の聞き取り調査対象を抽出し、「民族性」「ジェンダー観」の意識を中心にインタビューにより質的調査を行った。

華僑だけでなく地元の日本人や観光客が訪れる祭りやイベントで行われる民族芸能は、「観られる」ことを強く意識したパフォーマンスである。これらのイベントで、主催者が表現したい要素は何か、誰の為に、誰に向かってメッセージを発しているのかという問題を理解するため、芸能のプログラム内容の選定におけるジェンダーの側面について聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

横浜中華街における祭りやイベントでの民族芸能プログラムの調査で、民族芸能サークルの参加状況がわかった。各出し物の映像を記録し、演奏されている音楽や舞踊のレパートリーを整理した。結果、関帝誕などの宗教に関わる祭りや春節などの季節行事では、中華学校の生徒や卒業生による獅子舞や民

族舞踊などの伝統的な芸能が中心であるのに対して、国慶節や双十節などの建国記念行事では、上記の伝統芸能に加えて、近隣の学校からブラスバンドやコーラスなどのグループが参加していることがわかった。伝統的な民族芸能では、男女のグループが明確に分かれているのに対して、その他の出し物では男女混合で行なわれている場合がほとんどであった。

イベントの主催者や参加者への聞き取りを行い、参加動機や意義、また今後の展望について調査を行った。結果、華僑社会のリーダー的存在である年配の男性達（関帝廟・媽祖廟理事・横浜中華街発展会理事など）は、華僑の伝統的なジェンダー役割を芸能の教育を通して若者に継承したいという意識を少なからず持っていることがわかった。一方で若者グループについては、それぞれの民族芸能の伝統であるし、男らしさや女らしさが表現されるべきものだから、男女別で当然という意見の他に、男女混合で行ないたいという意見もみられた。

横浜山手中華学校（大陸系）と横浜中華学院（台湾系）の二校を対象に実地調査を行なった。前者では、音楽の前任教員及び現職教員からの聞き取り、授業見学を行なった。その結果、音楽の授業内容は、1950年代から1970年代には中国本土での社会主義革命や文化革命に強く影響されていたことが明らかになり、社会主義や毛沢東を賛美する歌曲が多く用いられていたことがわかった。しかし、中国における社会事情の変化や、日本社会に定着が進む老華僑のニーズの変化によって、現在は、中国の歌曲を収めた中国語の教科書に加えて、日本の公立学校で使用されている教科書も用いられ、中国と日本、双方の文化に通じた児童生徒を育成しようとしていることがわかった。後者の学校では、現職の校長及び音楽と民族舞踊・獅子舞の教員からの聞き取りを行ない、授業見学を行なった。その結果、音楽の授業では台湾で使用されている教科書がそのまま使われており、日本の音楽教材は補助的にしか用いられていないことがわかった。これは学校の教育方針である「民族教育」すなわち中華民国の国民としてのアイデンティティ教育という柱にのっとって音楽教育が行なわれている結果であることが明らかになった。また、民族舞踊・獅子舞の授業では、前者は女子のみ、後者は男子のみが参加することになっており、指導者が女性らしさ（前者）、男性らしさ（後者）を表現するための具体的な所作について指導している様子を観察することができた。音楽の授業では、男女別の指導はされていないのに対して、民族舞踊・獅子舞などの身体的芸能では明らかにジェンダー表現を重視

する教育が行なわれていることがわかった。大陸系と台湾系の学校に関する比較調査を行ったことで、双方の教育方針の差が明らかになった。

民族芸能サークルのメンバーへの聞き取り調査からは、彼らの多様なジェンダー意識が見えてきた。サークルには、長年日本に暮らす老華僑のみではなく、近年やってきた新華僑の子女の他、日本人と華僑とを親に持つ者や、両親共に日本人という者など様々な文化的背景を持つ若者たちが参加している。彼らは練習や公演を重ねることで、中国的と考えられる女性らしさや男性らしさのステレオタイプな表現を習得する一方で、メンバー同士の交流によって単一でないジェンダー表現に気づき、また自らのジェンダー意識を見つめなおしているという側面が明らかになった。例えば獅子舞は、「心技体」の鍛錬による心身ともに力強い男らしさを獲得することが重要だと教えられているが、メンバーの中には、それが必ずしも男性のみに与えられた特徴ではないと考える者もあり、自分は女性的なしなやかさや美しさ、そして協調性といった点を表現したいと考える者もいた。また獅子舞や龍舞が中国に起源をもつものであることを認識しながらも、それが日本で受け継がれており日本人も参加していることから、国境や民族を超える文化と認識する傾向も見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

有澤知乃

「中華学校における音楽教育 - 横浜山手中華学校と横浜中華学院を事例として」

東京学芸大学紀要 人文社会科学系

11 66 集 pp.205-215 2015 年

〔学会発表〕(計1件)

Arisawa, Shino

The Roles of Music in 'Ethnic Education' at Overseas Chinese Schools in Japan

International Council for Traditional Music, International Symposium of Study Group of Music of Minorities

National Ethnology Museum, Suita city, Osaka 19-23 July 2014

〔図書〕(計1件)

Arisawa, Shino

Music Education at Overseas Chinese Schools in Japan: Changing Relationship between the Homeland and Host Society

In *Music and Minorities*
National Ethnology Museum (forthcoming)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有澤 知乃 (ARISAWA, Shino)

東京学芸大学・留学生センター・准教授

研究者番号：90588906